Shakespeare の *Antony and Cleopatra* の Seleucus Scene について

中村　六男*

Mutsuo NAKAMURA : On the Interpretations of the Seleucus Scene in Shakespeare's *Antony and Cleopatra*

(1959年9月20日受理)

(1)

Actiumの戦いに敗れてから後に Antony は Alexandria の戦いで一度は勝利をおさめたけれども，その翌日の戦いでエジプト側の艦隊が戦わずしてローマ方の艦隊に寝返りをうつてしまつたので，Antony はついに自殺をとげ，Cleopatra は霊廟にとじ籠つていたが，まもなく其処で捕えられる。やがて Octavius Caesar がその霊廟にきて女王にあう。女王は全財宝の目録を Caesar に手渡し，その目録に偽りのないことをそこに居合せた家来の財務官である Seleucus に証言をさせようとする。ところが Seleucus は臣下でありながら，女王を裏切つて，正直者らしくみせかけるために，その目録に載せていない幾多の財宝が隠されていると女王の不正を暴露し，女王が大いに怒る場面が Shakespeare の劇 *Antony and Cleopatra* にある。これが the Seleucus scene であつて，第五幕第二場140—175行である。その場面をその前後と共に示すと，

〔*Flourish and Shout within,* "Make way there : Caesar!"

Enter Proculeius, Caesar, Gallus, Maecenas, *and others of his Train.*

Caes. Which is the Queen of Egypt ?
Dol. It is the emperor, madam. 〔*Cleopatra kneels.*
Caes. Arise, you shall not kneel :
I pray you, rise, rise, Egypt.
Cleo. Sir, the gods
Will have it thus, my master and my lord 115
I must obey.
Caes. Take to you no hard thoughts;
The record of what injuries you did us,
Though written in our flesh, we shall remember
As things but done by chance.
Cleo. Sole sir o' the world,
I cannot project mine own cause so well 120
To make it clear, but do confess I have
Been laden with like frailties, which before
Have often sham'd our sex.
Caes. Cleopatra, know,
We will extenuate rather than enforce :
If you apply yourself to our intents, 125
Which towards you are most gentle, you shall find
A benefit in this change, but if you seek
To lay on me a cruelty, by taking
Antony's course, you shall bereave yourself
Of my good purposes, and put your children 130
To that destruction which I'll guard them from,
If thereon you rely. I'll take my leave.
Cleo. And may through all the world : 'tis yours and we
Your scutcheons, and your signs of conquest shall
Hang in what place you please. Here, my good lord.
Caes. You shall advise me in all for Cleopatra. 135
Cleo. 〔*handing a paper.*〕 This is the brief : of money, plate, and jewels,
I am possess'd of, 'tis exactly valued,
Not petty things admitted. Where's Seleucus ?

* 信州大学繊維学部英語研究室

Enter Seleucus.

Sel. Here, madam. 140

Cleo. This is my treasurer, let him speak, my lord,
Upon his peril, that I have reserv'd
To myself nothing. Speak the truth, Seleucus.

Sel. Madam,
I had rather seal my lips, than to my peril 145
Speak that which is not.

Cleo. What have I kept back?

Sel. Enough to purchase what you have made known.

Cses. Nay, blush not, Cleopatra, I approve
Your wisdom in the deed.

Cleo. See, Caesar! O behold,
How pomp is follow'd! mine will now be yours, 150
And should we shift estates, yours would be mine.
The ingratitude of this Seleucus does
Even make me wild. O slave, of no more trust
Than love that's hir'd? What, goes thou back? thou shalt
Go back, I warrant thee: but I'll catch thine eyes 155
Though they had wing. Slave, soulless villain, dog!
O rarely base!

Caes. Good queen, let us entreat you.

Cleo. O Caesar, what a wounding shame is this,
That thou vouchsafing here to visit me,
Doing the honour of thy lordliness 160
To one so meek, that mine own servant should
Parcel the sum of my disgraces, by
Addition of his envy. Say, good Caesar,
That I some lady trifles have reserv'd,
Immoment toys, things of such dignity 165
As we greet modern friends withal, and say
Some nobler token I have kept apart
For Livia and Octavia, to induce
Their mediation, must I be unfolded
With one that I have bred? The gods! it smites me 170
Beneath the fall I have. [*To Seleucus*] Prithee go hence,
Or I shall show the cinders of my spirits
Through the ashes of my chance: wert thou a man,
Thou wouldst have mercy on me.

Caes. Forbear, Seleucus.
[*Exit Seleucus.*

Cleo. Be it known, that we, the greatest, are misthought
For things that others do; and when we fall, 176
We answer other's merits in our name,
Are therefore to be pitied.

Caes. Cleopatra,
Not what you have reserv'd, nor what acknowledg'd,
Put we i' the roll of conquest: still be 't yours, 180
Bestow it at your pleasure, and believe
Caesar's no merchant, to make prize with you
Of things that merchants sold. Therefore be cheer'd,
Make not your thoughts your prisons: no, dear queen,
For we intend so to dispose you, as 185
Yourself shall give us counsel: feed and sleep:
Our care and pity is so much upon you,
That we remain your friend, and so adieu.

Cleo. My master, and my lord!

Caes. Not so: adieu.
[*Flourish. Exeunt Caesar and his Train.*

Cleo. He words me, girls, he words me, that I should not 190
Be noble to myself. But hark thee Charmian.
[*Whispers Charmian.*

[V. ii. 110—191]

の通りであるが，種々問題を含み，従来様々な解釈が下されている場面である。それで近頃余りにもこの場面に拘泥するのを難じて，この場面の背後にある本当の意味

を究明しようとして穿鑿するのは恰も油絵に描かれた樹木の本体を知ろうとして画面を針で穿じり，ついにカンバスの布地を出してしまう様なもので，そんなことをしている間に，この場面が心に映し出す幻像をこわしてしまうことになると云う学者さえある（Clifford Q. Lyons : Shakespeare Quarterly Vol. IX. No. 3, p. 289）程である。しかしながらこの場面の解釈の如何によつてはこの劇全体の意義や価値も異つてくるし，Cleopatra の性格についても全く間違つた誤解をしてしまうことにもなる。したがつてこの場面を正しく解釈してこそ始めてこの劇を正しく理解することができ，また鑑賞もできるのである。

(2)

Seleucus scene を正しく理解するには，Cleopatra の人物を先ず正当に解さなければならない。それには吾々の観察の焦点を何処に合わせて考察すべきかが問題になつてくる。というのは焦点の合せ方によつて Cleopatra の人物なり性格なりが随分異つたものとして吾々の脳裡に映じてくるからである。従来 Cleopatra の人物を眺め，したがつて Seleucus scene を解釈するにあたつて観察の焦点を合せてきたものを大別するならば，史実上の人物としての Cleopatra, Plutarch の *Lives* のうちに表現されている人物としての Cleopatra, および Shakespeare のこの劇その物の中に出現する王者としての Cleopatra に三大別することができると思う。

史実上の人物としての Cleopatra はどのような人物であつたのであろうか。The Oxford Classical Dictionary, Chambers's Biographical Dictionary, および Encyclopaedia Britannica を参考にして考察してみる。

Cleopatra という言葉はエジプトの Ptolemy 王朝の女王に対する一般的な名称である。この劇で扱つている女王は Ptolemy XII である Aulets 王の第二王女であつて，69 B.C. に生れた Cleopatra VII のことである。彼女の弟である Ptolemy XIII (63—47 B.C.) と 51 B.C. に17才で結婚して Cleopatra VII となつた。夫の Ptolemy XIII と共同でエジプトを統治した。その後間もなく Ptolemy XIII に追放されて Syria にのがれ，其処で兵を挙げて失つた王権を回復しようとしていた。丁度その時にローマから Julius Caesar が Pompey を追つて，エジプトを目指して兵を率いてきた。Cleopatra は直ちに Caesar の情婦となり，連合してエジプトに攻め入り，Ptolemy XIII に Pompey を殺させ（48 B.C.），王権を回復して以前の様に Ptolemy XIII とエジプトを共有した。やがて Cleopatra は Caesar に戦をおこさせ，Ptolemy XIII をやぶり，王をナイル河に溺死させた。Cleopatra は更に別の弟である Ptolemy XIV (59—44 B.C.) と 47 B.C. に結婚し，この幼少な弟と共同でエジプトを支配した。44 B.C. にはこの弟の Ptolemy XIV を毒殺して独裁君主となつた。この Cleopatra VII という女王は元来アレキサンダー大王の部将の一人であつた Ptolemy の血をひくギリシヤ人であつて，エジプト人種の血が一滴も加わつていない純粋なマケドニア人であつた。絶世の美人とは決して云い難いが，人の心を捕える魅力を持ち，教養が高く，数カ国語を自由に駆使し，人心を収攬する術に秀で，非凡な支配者であり，男勝りの大胆さを持ち，極めて活潑な大政治家であつた。自己を太陽神 Re の娘と信じ，アレキサンダー大王にも劣らない大野心家であり，世界征服の大野望を懐いていた。女性として男性を本心から愛することは決してせず，如何なる英雄も彼女の野心達成の一手段として愛したに過ぎなかつた。先ず Julius Caesar の情婦となり，Caesarion を産み，Ptolemy XV として王位に即け，やがてローマ帝国をも支配しようと考えた。Caesar がローマに帰つた時には権勢を一層得ようと彼に随行してローマに行き，情婦として公然と彼と同棲した。Caesar が帝王になることに暗殺によつて失敗し，Cleopatra がローマ人達に人気のないことを知ると直ちにエジプトに帰つた。やがて Philippi の戦いで Caesar の暗殺者の Brutus や Cassius の軍が Antony と Octavius との軍に破られ，Antony が権力者となると，Cleopatra はまたもや 41B.C. に彼の情婦となつた。そして彼が 40B.C. にローマに帰国するまで Alexandria に同棲し，すつかり彼を彼女の恋の虜としてしまつた。Antony は帰国中に Octavius Caesar の姉の Octavia と結婚したが，Octavius と共同でローマ帝国を支配することの不可能であるとの理由のもとに，再びエジプトに戻り，Cleopatra とついに結婚した。Antony と Cleopatra との間には Alexander および Ptolemy という息子二人と Cleopatra という娘一人とが産れた。いまや Cleopatra の勢力は Antony の勢力を凌ぐ程強大であつた。しかし彼女は Antony には彼が死ぬまで可なり真実であつた。Cleopatra は Antony をかり立てて Octavius Caesar と戦わせ，ローマ人に対するマケドニ

ア人の恨みを晴らすと同時にローマ人をもつてローマを征服しようと企てた。Antony が Armenia の征服から凱旋した際に Cleopatra は Isis の神の扮装をして現われ，Antony は彼女を諸王を支配する東方の女王と公表した。このことは Antony 自らはローマ帝国の皇帝であり，Cleopatra はローマ帝国の女帝であるとの意味であつた。同時にまたローマ帝国征服後欧州およびアジアに君臨しようとする Cleopatra の野望実現の手始めとの意味でもあつた。Actium の戦いで Antony の率えるローマ軍が Octavius Caesar の軍と戦うのを拒んだので，Antony は大敗し，Cleopatra の野望はついに夢と消え去つた。エジプトは Cleopatra のために戦うことを申し出たが，女王は無駄な犠牲を払うこととしてそれをこばみ，Octavius に自分の息子が代つてエジプトの王位に即くことを許容するようにと要望した。ところが Octavius は如何にも Cleopatra の要望を容れるが如くあしらい，騙して女王の身柄とその財産とを確実に手中に収めてしまつた。Cleopatra はついに Octavius Caesar を意の如くすることができず，幻滅を痛く感じさせられ，また自殺の機会をも与えられたので，Re の神の使者たる asp に身を咬まして，30 B.C. に父である神の Re の許へとこの世を去つたのである。ローマ人はローマ征服を企てた Cleopatra を恐れるとともに憎んだのは Hannibal (247—183？B.C.) と同じ程であつたと云われている。

以上が大体 Cleopatra に関する史実である。このような史実に表わされている Cleopatra に焦点を合わせて，その映像に捉われ，それによつてこの劇の Seleucus scene を解釈するならば，この場面は Cleopatra が息子をエジプトの王位に即け，自らも相変らず生きながらえようとして Octavius Caesar に取り入ろうとしたが，財宝目録の不正を臣下の財務官である Seleucus にあばかれ，怒るとともに悲哀を痛く感じさせられるといつた場面となり，この劇の本筋とは関係の薄い，Cleopatra が Octavius にうまく欺かれる場面であるといつた解釈にならざるを得ない。このような解釈をとるならば単に文章の表面的な浅い意味のみを取り，この場面の前後を無視し，この劇の構造の巧妙さから来る興味や，Cleopatra の性格に対する理解を見失う結果になつてしまう。また芸術作品であるこの戯曲をば歴史と混同しているとの非難をも免かれることが出来ないだろう。しかしながらこのような解釈をとる学者が相当に多い。すくなくともそういつた史実的な考えが無意識的に先入観となつていて，それに依つて劇としてこの場面を解釈している学者が多い。Harley Granville-Barker (*Prefaces*: Second Series, pp. 157—158や A.C. Bradley (*Oxford Lectures on Poetry*: p. 301) の様な有名な Shakespeare 学者も大体において前述の解釈の弊に陥つていると云うことができよう。

(3)

次に Plutarch の *Lives* の中に表わされている Cleopatra に焦点を合せて映つた像から Shakespeare の劇の Seleucus scene を解釈するものについてであるが，Shakespeare はこの劇を Plutarch の North 訳に相当忠実に従つて創作しているので，この解釈には傾聴すべき所のあるのは当然である。しかしながら正しい解釈を下すには Shakespeare の作品其物によるのが正しいのであつて，Plutarch の *Lives* より得た解釈をこの劇の解釈に当て嵌めるのは補助的なものを本物と見做すことになり，本末顚倒ということになる。更に Shakespeare は Plutarch (c. A.D. 46—after 120) とは時代が異り，考えも異つているので，Plutarch の眺め方を補助的に用いるとしてもそのまま直ちに Shakespeare のこの劇の Cleopatra なり Seleucus scene なりに当て嵌めて解釈するのは危険と云わねばならない。

Plutarch は Athens の Academy に学んだ人であるから，その開祖である Plato の思想の流れを汲んでおり，更に Stoicism や Pythagoras の哲学の影響も受けており，其等を折衷したものを自らの哲学としている。彼は特に倫理問題に興味をよせ，極端に走ることを嫌つている。従つて *Lives* では Antony の物語は Demetrius の物語とともに 'the blameworthy and the bad' な例として語られている。Cleopatra にも好意をよせず，非難すべき人間として述べられていることは勿論である。

North 訳の抜粋や Dryden Edition の Plutarch's *Lives* を参照して Cleopatra の人物や Seleucus scene を極めて簡単に述べることにする。Cleopatra は男に対して絶大なな魅力と支配力をもつていた。特に男の悪い面を助長させる性質を多分に持つていた。Antony にもそうした性質を強く働かせて，彼の善良な半面を絶えず抑え，堕落させる陥穽として行動した悪女である。容姿は妖艶で，言葉づかいは優雅で，声色は極めて美しく，

話術が実に巧みであつた。Julius Caesar や Cneus Pompey (Pompey 大帝の息子) を魅惑し，更に Antony をも蠱惑して恋の虜としてしまつた。自惚と自信も強く，自らの美と魅力とに確信をもつて，自らを Venus の神にも比敵する女と考えていた。分別力にも秀で，才知は極めて優れ，人をもてなすのに贅沢のかぎりを尽し，しかも細かな所にもゆきとどくといつたような点では如何なる人の追従も許さなかつた。また応対している相手と調子を自由自在に合わせ，その心を惹き，また機智にも勝れていた。しかし容貌が他の如何なる女性も及ぶことのできない程に美しかつたわけでは決してなかつた。むしろその魅力は精神的な働きの面に何人も及ぶことのできない所を持つていたことにあつた。応対している相手はその美しい音楽的な声で極めて巧みに話す応対振りに心をすつかり捕えられてしまうのであつた。Cleopatra の自由に駆使した言葉はエジプト語，ギリシャ語，およびラテン語は勿論のこと，Aethiopians, Arabians, Troglodytes, Hebrews, Syrians, Medes, および Parthians 其他の国民の話す国語に及んだ。Antony とはあらゆる娯楽や遊戯を共にし，日夜彼の許を離れず，あらゆる手練手管を心得ていて，それらによつて彼を完全に恋の虜にしてしまつた。

Plutarch は Cleopatra の人物を以上述べたような女性として表現している。そしてこのような人物であつたので，Antony を操つて Octavius Caesar と Actium で海戦をさせた。勿論 Antony の部下達の予想通りその戦に Antony は大敗した。敗戦後 Cleopatra はあらゆる種類の毒物を集め，最も苦痛が少くて死ぬことのできるものは何かと囚人に実験をさせ，自らの面前で毒蛇などに咬ませて死ぬ様子を眺めたりもした。その結果，aspick に咬まれると，ただ顔に少しく汗をうかべ，非常に睡気を催し，感覚を失つて死ぬので，所謂安楽死をするには aspick によるのが最もよいことを見出した。他方その間に Antony と Cleopatra はアジアにいる Octavius Caesar に使者をやり，Cleopatra はエジプトの領土を子供に譲ることを認めるように，Antony はエジプトに留まることを許し，もしそれを許さないならば，身を政治から引いて Athens に一庶民として住むことを許すように，とそれぞれ要望した。しかし Caesar は Antony の要望はすべて斥けたが，Cleopatra の要望は，もしも彼女が Antony を殺すか，或は彼をエジプトから逐放するならば，理にかなつた要求はすべて認めると回答をした。Cleopatra は Antony には彼が死ぬまで真実であつて，彼を殺したり，逐放したりしようとする程の毒婦ではなかつた。彼女は堅固な霊廟を建て，その中に財宝や貴重品を全部隠し，Alexandria の敗戦後には自らもその中に籠つた。Caesar は総ての財宝が焼かれ，また女王が Antony の様に自殺するのを恐れた。というのは Caesar は財宝を全部安全にその手中に収めるとともに，ローマ人の恐れまた憎んでいる Cleopatra をば生き捕りにしてローマに凱旋し，勝利を飾り，人心を収攬しようと企てたからである。そのために種々策略をめぐらし，ついに女王を霊廟で生け捕りにする。その時 Cleopatra は短刀で自殺を計るが，阻止されてしまう。Caesar は部下に色々と甘言を用いさせて Cleopatra を懐柔しようとした。しかし女王は悲しみと激情の余り胸を強打し，そのために身体の処々に潰瘍や炎症ができ，高熱に冒された。女王はこれ幸とばかり熱病に罹つたことを理由として，食物を断つて死のうと企てた。Caesar は Cleopatra の意図を察知して，もしもそんなことをして死ぬならば，彼女の子供を虐殺するとおどした。女王はついに子供のために折れ，食物を摂り，やがて Caesar 自身彼女を見舞う。其処で Seleucus scene が起る。

Shortly after, Caesar came him selfe in person to see her, and to comfort her. Cleopatra being layed upon a litle low bed in poore estate, when she sawe Caesar come in to her chamber, she sodainly rose up, naked in her smocke, and fell downe at his feet marvelously disfigured : both for that she had plucked her heare from her head, as also for that she had martired all her face with her nails, and besides, her voyce was small and trembling, her eyes sonke into her heade with continuall blubbering : and moreover, they might see the most parte of her stomake torne in sunder. To be short, her bodie was not much better then her minde : yet her good grace and comelynes, and the force of her beawtie was not altogether defaced. But notwithstanding this oughly and pitiefull state of hers, yet she showed her selfe within, by her outward lookes and countenance. When Caesar had made her lye downe againe, and sate by her beddes side : Cleopatra began to cleere and excuse her selfe

for that she had done, laying all to the feare she had of Antonius. Caesar, in contrarie maner, reproved her in every poynt. Then she sodainly altered her speache, and prayed him to pardon her, as though she were affrayed to dye, and desirous to live. At length, she gave him a breefe and memoriall of all the readie money and treasure she had. But by chaunce there stoode Seleucus by, one of her Treasorers, who to seeme a good servant, came straight to Caesar to disprove Cleopatra, that she had not set in all, but kept many things back of purpose. Cleopatra was in such a rage with him, that she flew upon him, and took him by the heare of the head, and boxed him wellfavouredly. Caesar fell a laughing, and parted the fray. Alas, said she, O Caesar: is not this a great shame and reproche, that thou having vouchesaved to take the peines to come unto me, and has done me this honor, poore wretche, and caitife creature, brought in this pitiefull and miserable estate: and that mine owne servaunts should come now to accuse me, though it may be I have reserved some juells and trifles meete for women, but not for me (poore soule) to set out my selfe withall, but meaning to geve some pretie presents and gifts unto Octavia and Livia, that they making meanes and intercession for me to thee, thou mightest yet extend thy favor and mercie upon me? Caesar was glad to heare her say so, perswading him self thereby that she had yet a desire to save her life. So he made her answere, that he did not only geve her that to dispose of at her pleasure, which she had kept backe, but further promised to use her more honorably and bountifully then she would thinke for: and so he tooke his leave of her, supposing he had deceived her, but in deede he was deceived him selfe.

上の文はPlutarch の *Lives* の North の訳からの引用であるが，極めて写実的にこの場面が描かれている。この引用で注意すべきことは，Cleopatra が恰も死を恐れ，生きようと思つて Caesar の許しを請うごとく振舞つたこと，換言すれば女王の死の決意は固かつたと述べていること，女王の財務官である Seleucus が前以つて計画的に居たのではなく偶然に其処に居合せたと述べていること，女王が彼に裏切られて怒り，彼の髪をつかみその顔をしたたか撲つたと述べていること，および実際は女王が Caesar に欺かれたのではなく，Caesar の方がすつかり欺かれたのであると述べていることである。Seleucus は以前に Pelusium の町が Octavius の軍にやすやすと陥れられたとき，その町を守備していたのであつたが，Cleopatra の命令によつてその町を降服させたのであるとの噂がたつた。そこで Cleopatra が自らの潔白をあかすために Seleucus の妻子を Antony の前に引き出し，彼の思うままに処分させたとも Plutarch は述べている。従つて Seleucus の裏切りは 'to seeme a good servante' のためのみではなく，かつての恨みをも晴らすためであつたのであろうと解される。

Plutarch の *Lives* に述べている所に焦点を合わせて Shakespeare の劇の Seleucus scene を解釈するならば，Cleopatra はAntony の後を追つて死のうと決意していたが，息子をエジプトの王位に即けることを Caesar に認めさせようとして生きてきたが，霊廟の中で生け捕りにされ，自殺決行を不可能にされてしまつた。Caesar との会見の際に居合せた財務官の Seleucus によつて Caesar に提出した財宝目録の不正を暴露され，大いに怒り，Seleucus に乱暴を働き，敗残者の哀れさを訴えるとともに，その裏切りを利用して如何にも生に執着しており，ローマに連行されるのも覚悟しているが如く見せかけて，巧みに死の決意を隠し，Caesar を欺いて満足と安心を与え，その警戒の手を弛めさせ，かねて用意して置いた aspick を田舎者に持ち来たらせて自殺をすることを可能にさせた場面であるとの解釈になる。この様な解釈は，さきに述べたように Shakespeare が可なり忠実に Plutarch の *Livs* に従つて彼の劇を作つているので，根本的には彼の劇の Seleucus scene に当て嵌るのであるが，女王の態度が悪女の敗残の末路の一種の腕きとして述べられていて，Shakespeare の劇のこの場面における Cleopatra の王者としての威厳をなおも保ちつつ，Caesar を内心軽蔑しながら如何にも巧みに欺くのとは相当に場面の雰囲気が異つているのである。Arthur Symons (The Henry Irving Shakespeare, Vol. 11, Intro. pp. 175–176) などは大体この様な解釈に近い解釈をしている。

(4)

Shakespeare の劇 *Antony and Cleopatra* 其物に焦点を合せて，そのうちに表わされている王者としての威厳をもつた Cleopatra よりこの Seleucus scene を説く解釈であるが，前述の様な Cleopatra の威厳をそこねる解釈を是正する解釈として所謂 the 'put-up-job' interpretation of the Seleucus scene という解釈をとつている学者がいる。ローマの天下を轟かした Antony を自由に操縦した偉大な愛の女王 Cleopatra が，たとえ敗戦したとはいえ，己の財宝を隠匿し，その不正を自らの臣下の財務官である Seleucus に暴露され，怒つてその眼を爪で引掻こうとして騒ぎ立て，しかも泣きごとをならべ，Caesar に笑われるのは，余りに威厳のないあさましい Cleopatra の姿であつて，Shakespeare のこの劇の Cleopatra とは全く調和しない場面である。そこでこのあさましさを払拭する見方として，この場面は Cleopatra と Seleucus とが前以つて Caesar を欺くために仕組んでおいた芝居であるとの解釈が生じてくるのである。これが即ち the 'put-up-job' interpretation である。この説を最初に唱え出したのはドイツの歴史学者 Adolf Stahr (*Cleopatra*, 1864) であつて，Plutarch の 'but in deede he was deceived him selfe' よりヒントを得たと云われている。この説を受け継いでこの場面を説いた Shakespeare 学者は Horace Howard Furness (A New Variorum Edition of Shakespeare: *The Tragedie of Anthonie, and Cleopatra*; Preface, . xiipi—xiv) である。彼の説く所によると，Antony の死体が運び去られた時から Cleopatra の死の決意は一瞬たりとも動揺しなかつた。勿論女王は自分の子供のために好条件を Caesar から得ようと願い，彼がどの様に出るかを見極めようとしている間に霊廟の中で捕えられて自殺決行の機会を失つて，それを果すことができなくなつてしまつた。そこで asps を手に入れる計画は厳秘にすることが必要となり，Caesar にその計画を探知されることを最も恐れた。したがつて自殺の決意を隠すために，Cleopatra は生きようと願つているばかりでなく，ローマへも連れていかれる覚悟をしていると偽つて Caesar に信じこませようとした。当時の風習では戦いに敗れた者は勝つた者に財宝のすべてを引き渡すのが義務であつた。そこでその財宝の目録から，後になつても女王としての体面を維持するだけの財宝をこつそりと除いて隠し置き，生きてローマにいく覚悟をしていると見せかけるのが最もよい方法だと考えた。そして Seleucus と謀つて芝居を仕組み，如何にも Seleucus に裏切られた様に演じて Caesar を完全に騙した場面がこの Seleucus scene である。(第二幕第五場で Cleopatra は Antony が Octavia と結婚したと伝える使者を実際に撲り，短刀でおどしているが，Plutarch ではこの場面で Seleucus を撲つているにもかかわらず，Shakespeare でのこの場面ではただ言葉の上で威嚇しているに過ぎない。) Shakespeare のこの場面では，Cleopatra は財宝の一部を隠した口実として，隠したと Selecus の主張するものは「つまらぬおもちや」とか「婦人の珍重するちよつとしたもの」であつて，極めて価値のないものや，Caesar の妻の Livia やOctavia に仲裁をしてもらうために贈物にしようと思つている其等より少々価値のあるものなどであると全く巧妙に述べている。そこで Caesar は Cleopatra には自殺の意志がなく，ローマにいく覚悟でいるものとすつかり欺かれて思いこみ，彼のローマの凱旋を飾るものとして Cleopatra を捕虜としてローマへ連れていこうとする計略にまんまとかかつたと内心大いに喜び，如何にも女王に対して寛大さと憐みを装つて退場していく。しかしその実は Caesar の方こそ Cleopatra の巧妙な芝居にいつぱいくわされて，"To fool their preparation, and to conquer / Their most absurd intents" (V. ii. 224—5) の様になり，"Caesar was the ass unpolicied." (*cf.* V. iii. 306-7) と女王に鼻をあかされた間抜者とあざ笑われたのである。

以上が Furness のこの場面の解釈であるが，この解釈を踏襲して更にその正当さを強調すると同時に発展させているのが John Dover Wilson (The New Cambridge Edition : *Antony and Cleopatra*, Intro., xxxiv—xxxv) である。Seleucus scene は Cleopatra が Seleucus と仕組んだ芝居，即ち 'put-up-job' であるが，それを明示するものは Shakespeare のこの劇の何処にもない。一体観衆はこの場面が 'put-up-job' であることを如何にして知り得るか。Wilson はそれは役者の演出によつて容易に出来ると云う。Cleopatra の現世に対する態度一般は未練がましく生に執着して策略を用いるようなものでは決してない様に Shakespeare のこの劇では表現されている。更に Plutarch のこの場面の最後の文章や，その傍註に 'Cleopatra finely deceiveth Octavius Caesar as though she desired to

live.' とあることによつても 'put-up-job' interpretation の正しいことが確証されている。Shakespeare がこの劇を作つた際に Plutarch の North 訳にあるものは何れも劇に採り入れているので，この箇処のみ見落す道理がない。Cleopatra がこの場面で，Caesar に死のうとしている決意を知られてそれを阻止されないように，恰も生きようとするが如く装つているのであることが解るならば，女王の決意の不動であつたことは何等疑いの余地がない。IV. xv での Antony の死の直後および V. ii の冒頭で女王は死の決意を述べている。ただ不意打ちに霊廟の中で逮捕されたためと，Caesar との会見のためとで，自殺決行を余儀なく延期されただけである。Caesar が退場するやいなや女王はその目的を果たすことになり，侍女の Charmian に耳打ちをして，かねて手筈を整えて様に asps を持ち込ませるために遣わす。その準備は IV. xv と V. ii との間でひそかになされていたことは疑いの余地がない。何かの機会に女王は Seleucus とその芝居の下稽古を少しくしておいたと云つても Cleopatra のような大策略家のことだから，おそらく穿ち過ぎた言葉ではなかろう。女王が Seleucus とどんな風にこのなれ合いの芝居を捕われの身でありながら仕組むことが出来たかは Shekespeare に尋ねるべき類の問題ではないと考えられる。以上が Dover Wilson の Seleucus scene の解釈の概要である。

Dover Wilson の解釈と同じく 'put-up-job' 説をとつているが，それと少しく趣を異にした解釈をくだしている学者に M. R. Ridley (The Arden Edition: *Antony and Cleopatra*, Intro., xLv–xLIx) がおる。Ridley はこの Seleucus sceneを 'put-up-job' と解釈することの正しいこと，その様に解釈すると二つの劇的な利点のあることを説いている。Cleopatra が Seleucus に本気で襲いかかつたものとしたならば，悲劇がこの場面に至るまで高揚されてきておりながら，女王が臣下に無様な乱暴を働くのは第二幕第五場での使者に乱暴するのと同じく女王としての威厳をそこねるものとなつて，観者に殆んど見るに堪えられない場面となつてしまう。そして再びそうした場面を不調和にも此処で繰返すことになる。'put-up-job' 説はそうして不合理性を取り除く。更にまた，Caesar が Cleopatra をうまく欺したと考え，如何にも得々として己の賢明さを内心誇りながら退場するが，その実まんまと女王に鼻をあかされているのを見るのは観客に痛快であり，Cleopatra の Caesarに向つての，"My master, and my lord!" という言葉に対して，Caesar の，"Not so : adieu." という言葉が全く皮肉に満ちた言葉として響いてくるのである，というのは女王は Caesar の方こそ「ばかし合い」にまけてしかもそれに気付かない頓馬であるのを承知しているのが観客に解るからである。しからばこの場面が 'put-up-job' であるのを観客は如何にして知り得るか。もし不可能ならば，実際の劇作家としての Shakespeare の意図したものとは全く異つた場面の解釈となつてしまうであろう。その点については Dover Wilson は単にそれは演出によつて観客に知らせることは容易であると述べているに過ぎない。この点を Ridley は明瞭に示している。注意深く理解力のすぐれた観客ならば，Cleopatra が二人の侍女と捕えられている霊廟の中に Seleucus を呼びよせていたことを不思議に思うであろう。もし女王が提出した財宝の目録に不正のないことを立証しようとするならば，何故に自らの云うなりになると考えられている臣下の財務官である Seleucus の証言を求めて，Caesar に偽りのないことを信用させようとしたのであろうか。ものわかりのよい観客ならば，目前に演ぜられている場面には目には見えない何かが隠されているのではないかと疑念を懐くに相違ない。そこで Cleopatra を演じている役者が，"Speak the truth, Seleucus." (V. ii 143) と云う台詞の言いまわしが重要なポイントであつて，それが Seleucus の台詞のきつかけとなつて，彼は如何にも恐れるが如く，また女王は立腹と屈辱とを少しく誇張的に，演ずることによつて，その場面がなれ合い芝居であることを容易に明瞭に示すことができるのである。以上の様に Ridley はこの場面の要点を巧みに解明している。

Ridley は Seleucus scene を 'put-up-job' とする解釈をとり，Dover Wilson の説明の不足を補つているが，女王の死の決意に関しては，Cleopatra は Antony の死後その後を追つて死のうとする決意は高貴にして確固不動のものであつたとする Dover Wilson の解釈とは異つた解釈を下している。この場面を Caesar を欺いて警戒の手を弛めさせ，自殺決行の機会を得るための手段とは見做さず，Cleopatra の死の決意はそれ程に不動のものではなく，Caesar から好条件を獲得するための時間をかせぐ手段であつて，もしそれができなかつたならば自殺を決行するための時間を得るための手段であつたと説いている。女王の死の決意は絶えず動き，Caesar の

意向を Dolabella から聞いてから後始めて初志を果して死んだのであると説明している。

以上の 'put-up-job' の解釈はこの場面の説明としては相当に傾聴に価する解釈であるが，Shakespeare はものわかりのよい観客のみを考慮に入れてこの劇を作つたのであろうか。彼はエリザベス朝の所謂「大衆劇作家」であつた事実を吾々は忘れてはならない。果してこの場面が 'put-up-job' であるならば Shakespeare は彼の他の劇から考えても必ずそれを観客に解るように明示しておく筈である。従つて 'put-up-job' の解釈は穿ちすぎた解釈であるとの批判はどうしても免れることはできないと思われる。

前述の 'put-up-job' 説と同様に Shakespeare のこの劇其物に焦点を合わせて観察しているが，Cleopatra の死の決意の動揺を強調して 'put-up-job' の解釈までも捨て去つた解釈をしている Shakespeare学者に G. Wilson Knight がおる。Knight に依ると，Cleopatra は Shakespeare のこの劇では serpent の image で表わされ，The serpent of Old Nile である。この女王は蛇の如く底知れぬ悪の利己的な資質を持つている。善の資質と悪の資質との混合の権化であつて，Cordelia の様な善と Dady Macbeth の様な悪を持つた，所謂 Adam に原罪を犯させた Eve 様な女性で，女性としての全性質を完備した完全なる女性である。そして蛇の蛇行する様に，また脱皮する様に，常に変化変転する。'Infinity of variety and wavering' である。従つてその死の決意も絶えず動揺するのである。Seleucus scene は巧妙な騙し合いの勝負である。Cleopara は如何にも屈服した如く，Caesar はいかにも寛大に恩恵を施すが如く，両者とも偽つて振舞つている。Caesar はローマへの勝利品のうちに Cleopatra を生きたまま捕えて加えようと思つている。Cleopatra は Caesar の意図をすつかり知つており，彼をも魅了して恋の虜とし，Julius Caesar, Pompey, および Antony といつた愛の勝利の獲物のうちに加えようとの彼女の人生最後の望を果そうとしているのである。Caesar は Cleopatra を，Cleopatra は Caesar を，互に欺きあう。財宝目録を Cleopatra が Caesar に手渡した際に，その不正でないことを証言すべき家来の Seleucus に裏切られてその偽りであることを暴露されてしまう。そこで女王の怒りが Seleucus に向つて爆発する。最後に女王は女性らしい悲哀の言葉を発し，ついに Caesar を魅惑することに失敗したのである。この様に最後まで Cleopatra という the serpent of Old Nile は wavering course を進むのであつて，彼女が真剣になつて Caesar を魅了しようとしたことは財宝をごまかしていることからも充分に明瞭である。この勝負に失敗して絶対絶命の羽目に陥つて始めて愛の祭壇の最後の生贄である死へと至るのである。以上の様に Knight はその著書 *The Imperial Theme* (pp. 303—314) で述べている。

Cleopatra は果してこの Seleucus scene の時に生きようとする意志を持つている様に Shakespeare は描いているであろうか。また女王は女性としての娼婦的な性質の面を顕わして Caesar を魅了しようとした如く表現されているだろうか。またこの劇の資料となつた Plutarch の North 訳にもそう述べられていただろうか。この解釈の見当違いであることは極めて明瞭である。Knight は Serpent Imagery から Cleopatra の性質を解明しようと試みた。ところが Serpent に対する概念をキリスト教的な概念と近代の生物学的な概念とに局限させて，エリザベス朝時代の Serpent に対する概念とキリスト教以前におけるエジプトにおける Serpent-worship の行われていた時代の Serpent に対する概念とを無視したために（信大繊維研報，No. 8. 中村：*Antony and Cleopatra* おける Serpent-images 参照），Serpent に関する概念の一部のみを余りに強調しすぎて，重大な曲解に陥つているものと解せざるを得ない。Imagery よりの Shakespeare の作品の解明にも自から限度のあることが感じられる。

(5)

Seleucus scene にたいする主な解釈を分類して述べるとともにそれぞれの批判をもしてきたのであるが，それではこの場面をどのように解釈したならば正しい解釈ということができるであろうか。この場面を正しく解釈するのには，Shakespeare の作品であるこの劇そのものに観察の焦点を合せねばならないのは勿論であるが，なお留意しなければならないのは Shakespeare はさきに述べた様に史実によらず，専ら Plutarch の *Lives* の North 訳にかなり忠実によつてこの劇を作つていることである。しかしながら Plutarch が主として Stoicism の影響下に倫理性を強調して善悪の観念に捉われているのに対して，Shakespeare は，Stoicism 的な語句が全然無いわけではないが，主として Renaissance の思想の

影響を受けて善悪の観念に捉われずに自由に人間の本性を探究している。更に留意すべきことは，Shakespeare はキリスト教以前のエジプトの世界を描いていることから，キリスト教の自殺否定の思想に捉われていないことである。この劇はいわば日本の江戸時代の心中物の劇に似通つた一面すら持つかのように思われる。更に留意しなければならないのは，Shakespeare は Cleopatra を王者の威厳を常に持つているように描いており，同時に女性の神秘的本性を探究しているのであつて，妖婦や娼婦型の女として Cleopatra を描いているのでは決してない。Cleopatra には Shakespeare の sonnet 中にうたわれている彼自身の恋人の 'dark lady' の俤をしのばせ，同時にまた Elizabeth 女王の投影をも部分的に (ActⅢ sc. iii) に含ませていることは学者達の認めている所である。更に留意すべきは，Shakespeare の Cleopatra の眺め方は当時の世界観の主軸をなしていた chains of being による君主観によつていることである。それによると人間は動物と天使との間にあつて，その両者をつなぐ存在の鎖の一環であり，君主は天使と人間との接触している部分である。勿論君主と雖も人間であるから鎖の一環の下部にある動物的性質をも持つてはいるが，その本領は天使的な性質を多分に持つていることにある。Cleopatra は人間として官能的な所を多分にもつているが，Antony の死後に自殺の決意によつて彼の妻たる資格(真の女王)を得た時は，人間を形成する土水風火の四元素のうち風火の尊い二元素のみに浄化されて完全に天使の域に上昇したのである。更に留意すべきことは，既に述べた所であるが，Serpent image をもつて Cleopatra はこの劇ではしばしば表現されているが，それはキリスト教的な Serpent の image でもなく，現代的な Serpent の image でもなく，エリザベス朝時代の人々の Serpent の image で，更に serpent-worship の行われていた古代のエジプト人の serpent の image で女王を眺めなければ誤解をしてしまうということである。

以上述べたことを考慮の背景に置いて，先ずこの劇での Cleopatra の人物から考察を試みることにする。Cleopatra は人間の考えも及ばない程に cunning であるが，その愛は純粋なものであつた (I. ii. 143-149)。そうした愛を宿す肉体は永遠の喜びであり，天上にその源を発するものである (I. iii. 32-39)。Cleopatra の Antony に対する愛の強烈さは Act I. sc. v に巧みに示されており，Cleopatra は愛されることに喜びを感ずるよりは，むしろ自ら積極的に他を愛することに生きがえを感ずる女性である。Cleopatra の言葉に 'us that trade in love' (II. v. 2) とあるが，これは恋愛を自己の利益のために用いる娼婦と解するは間違いで，H. H. Furness が 'Cleopatra means that her dealing is in love; it is her very life'. と述べているように解すべきである。Cleopatra は Julius Caesar, Pompey, Antony とつぎつぎに情夫を変えているが，一情夫が死んでから他の情夫へと愛情を移したのであつて，一時に二人の情夫に内通するようなことはなかつた。Age cannot wither her, nor custom stale / Her infinite variety: other women cloy / The appetites they feed, but she makes hungry, / Where most she satisfies. For vilest things / Becomes themselves in her, that the holy priests / Bless her, when she is riggish. (II. ii. 235-240) といつた性格の女性であつたが，これとても相手を熱愛するために現わす性格であつて，利益のために愛情が動揺することを表現しているのでもなく，また相手をかまわず所謂 erotomania 的に愛することを意味しているのでもない。

Actium の海戦に敗れて Antony は自殺の覚悟をする (III. xi. 9-10) が，彼はこの劇を理解するのに特に重要な言葉を Cleopatra に云つている。

Now I must
To the young man send humble treaties, dodge
And palter in the shifts of lowness. (III. xi. 61-63)

即ち惨敗したからには，あの若造の Octavius Caesar に頭をさげて講和を申込み，勢力を失つた者の弄する奸策を用いて，言い抜けをしたり，ごまかしたりしなければならないと Antony は云つている。Antony 自らは，そう云つているにもかかわらず，性格上それが出来ず，Cleopatra が巧みにそれを実行していくことに吾々は注目しなければならない。

先ず子供の家庭教師を使者として Caesar に遣わし，Antony はエジプトに在住すること，もしそれが許されないならば Athens に引退して一庶民として生活することを許すようにと懇請し，Cleopatra は Caesar を偉大な権力者と認めて服従を約し，Ptolemy 王朝の王冠をその後継者の息子に与えるよう要請した (III. xii. 11-10)。それらに対して Caesar は，Antony の懇請を全部拒絶したが，女王には Antony をエジプトから追い出すか，

それとも彼の命を取るならばその要請を聴き容れないことはないと回答した(III. xii. 19-24)。しかし Cleopatra は妖婦ではなく，Antony を追い出したり，命を取るようなことをして我が身の利益と安全を計るような女性ではなかつた。

Caesar は Thidias を使者として遣わし，Cleopatra を籠絡して Antony を彼女から引き離すように命ずる (III. xii. 26-33)。Thidias は巧みな甘言を用いて Cleopatra を籠絡しようとする。彼女はその奸策を見抜き，'dodge and palter in the shifts of lowness' して，Caesar に靡くが如く振舞う。それを見て Antony は大いに立腹する (III. xiii)。従つてこの場面は多くの学者が誤解しているように，Cleopatra の心が動揺し，Caesar に内通しようとしているものと解すべきではない。

Alexandria の最後の戦いでエジプト艦隊が戦わずしてローマ艦隊に降服してしまう。Antony はこれをみて，Cleopatra が Caesar に内通してその艦隊を降服させたものと考え，極度に激怒し，彼女に対して殺意を示す。Cleopatra は恐れをなして霊廟に引き籠る。そして偽つて自殺を果したと Antony に伝えさせる。Antony はその虚報を信じ，自殺を計つて，仕損ずる。Cleopatra が何故に自殺をしたという虚報を Antony に伝えさせたか，その理由は虚報を信じて Antony がもしものことをしはせぬかと気遣つて Cleopatra が遣わした使者の Diomedes が Antony にいう言葉に明瞭である。"She had a prophesying fear / Of what hath come to pass : for when she saw — / Which never shall be found — you did suspect / She had dispos'd with Caesar, and that your rage / Would not be purg'd, she sent you word she was dead." (IV. xiv. 120-124) と。この言葉の中にある Which never shall be found というわざと付け加えた言葉に注意すべきである。これは Shakespeare が Cleopatra と Caesar とが内通していたのではないことを明らかにするために付け加えたものと思われる。

Cleopatra は Antony が衛兵に担がれて霊廟に来ない前に既に非常な悲嘆にくれている (IV. xv. 3-6)。またそれを見た時の悲しみの激しさ (IV. xv. 10-15)，また傷付いた Antony を霊廟の中に綱で引き揚げるときの力などを考えるならば，不貞な女のできることではなく，pure love を持つた女のみが為し得るものと考えられる。

以上述べて来た所でも明瞭であるように Cleopatra の人物の心髄は，その性格の振幅の広く多様性であつたにもかかわらず，純愛にあつたものと思われる。

次に Cleopatra の死の決意は常に動揺していたであろうか，それとも不動であつたのであろうかについて考察してみよう。Cleopatra は Antonyを霊廟の中に引き揚げる以前に既に死の決意を示している (IV. xv. 23-29)。Antony は臨終に当つて Cleopatra に Caesar によつて名誉と身の安全を計るようにと云うが，Cleopatra はそれに答えて自決の覚悟を云う (IV. xv. 45-50)。Antony の死の直後 Cleopatra は所謂虚脱状態に陥り，"then is it sin, / To rush into the secret house of death / Ere death dare come to us!" (IV. xv. 80-82) というが，これは Shakespeare がキリスト教の自殺否定の思想に対して，Cleopatra の自殺の固い決意を肯定しようと試みている言訳と解せられる。そしてすぐそれに続いて更に自殺の決意を Shakespeare は女王に云わせている (IV. xv. 86-88)。第四幕を，"Ah, woman, woman! Come, we have no friend / But resolution, and briefest end" (IV. xv. 90-91) と，Antony に死なれ，自らの軍隊にも裏切られ，また家来達にも見捨てられ，敗残の孤独な人間の自殺の決意で結んでいる。

Octavius Caesar は Antony の死を Decretas から聞いて敵ながらその部下達と悲しんでいるところに，Cleopatra からの使者であるエジプト人が来て，女王が降服し，Caesar の指令を仰ぐことを望んでいると伝える (V. i. 51-56)。さて此処で問題になるのは，Cleopatra が Antony を純粋に愛していて自決の決意が不動であつたならば，何故に Antony の死の直後に自決しなかつたかということである。Cleopatra は一個人であるとともに Ptolemy 王朝の君主でもあつたという立場を考える必要がある。先に Caesar に対してエジプトの王位を子供に継がせることを許容するようにと要請しており (III. xii. 16-19)，これを容認させようとした (V. ii. 12-21) ためであり，それが一国の君主としての重大な義務であつた。また Caesar は使者を通じて Cleopatra を丁重に扱うことを約束して王者に対する儀礼を守つているので，Cleopatra もそれに対応して一応勝者である Caesar に対して，いかに絶望状態に陥つているとはいえ，女王らしく相手をしなければ，王者の道を知らず，王者の威厳を失墜することになるだろう。従つて直ちに Cleopatra が自殺をせずに Caesar と交渉を

続けるために生き残つたことを愛情の動揺と見做したり，或は死の決意の動揺と見做すのは君主としての立場にある Cleopatra を理解しない誤解と思われる。ところが Caesar が Cleopatra を丁重に扱うことを装つていた理由は，Give her what comforts / The quality of her passion shall require / Lest, in her greatness, by some mortal stroke / She do defeat us. For her life in Rome / Would be eternal in our triumph. (V. i. 62-66) という Caesar の利己的なものであつた。それを賢明な Cleopatra は既に見抜いていた (IV. xv. 21-29)。Caesar が甘言をもつて欺いて Cleopatra を生け捕りにしようとしているので，Cleopatra も甘言をもつて欺いて自らの以前からの要請を容れさせようとする。"Pray you, tell him / I am his fortune's vassal, and I send him / The greatness he has got, I hourly learn / A doctrine of obedience, and would gladly / Look him i' the face." (V. ii. 28-32) と Caesar の使者 Proculeius に云う Cleopatra の言葉はその本心を表わす言葉でなく，策略の言葉である。というのはそれの少しく前のこの場の冒頭で，未だ霊廟の中で捕えられない前に Shakespeare は Cleopatra に自殺の決意を述べさせていること (V. ii. 4-8) から考えても明瞭であるからである。

Cleopatra は霊廟の中で捕えられた時，短剣で死のうとするが遮られてそれを果たすことができない。そこで犬からすらも病いの苦しみを取り去る死をも，Antony や国ばかりでなく，自分から奪い取るのかと歎き，Proculeius の慰める言葉にも耳をかさず，Where art thou, death ? / Come hither, come ; come, come, and take a queen / Worth many babes and beggars ! (V. ii. 46-48) と悲痛な叫びを発する。そして絶食をし，水を断ち，眠りをやめて死のう，いかなる恥辱とすべき死を遂げてもエジプトで死ぬ方が，生きてローマに連行されるよりはましであるとその本心を叫ぶ (V. ii. 49-62)。Caesar に "I would die". (V. ii. 70) と伝えろと Proculeius に云う。Cleopatra は Caesar と会見する直前 Dolabella に，"He'll lead me then in triumph". と云い，彼の "Madam, he will, I know it" (V. ii. 109-110) という言葉によつて Caesar が女王をローマに連れて行こうとしているのを確かめている。

Caesar との会見中に Cleopatra は彼に提出した財宝目録に偽りのないことを保証させるために Seleucus を呼びよせるのであるが，それより Seleucus に裏切られる Seleucus scene となるのである。この場面の直後に侍女の Iras はいよいよ自殺決行の時が来たことを女王に告げる (V. ii. 192-193)。Dolabella 再び登場して女王とその子供を三日以内にローマに送り出すという Caesar の真意を Cleopatra に内報する (V. ii. 197-203) すぐ前に，女王は前以つて手筈を整えておいた通り，asps を田舎者に霊廟に持つて来るように命じさせるため侍女の Charmian に耳打ちをする (V. ii. 193-194)。それ故に Cleopatra の自殺の意志はこの場面の後 Dolabella から Caesar の真意を聞き知つて後始めて最後的に決つたと見る学者の説は誤りであつて，この場面中も既に固く不動であつて，警戒の弛むのをねらつて自殺決行のできる機会をうかがつていたのであると解釈するのが正しいのである。

(6)

以上の考察から明らかのように，Cleopatra は非常に多様な変化に富んだ性格の人物であつたが，所謂妖婦，娼婦といつた女性では決してなく，王者の威厳を持つた女王であり，Antony に対する愛情は純粋なものであつた。Antony の死後彼を追つて死のうとした決意は常に固く，不動のものであつた。死をのばした理由はただ子供にエジプトの王位を継ぐことを Caesar に認めさせることと王者しての一般的な義務だけであつた。ところが Caesar は，女王を捕えてローマに連行して自らの凱旋を飾ろうとする全くの私利的な目的のために，部下に命じて Cleopatra を霊廟のうちで捕えてしまつた。Caesar はさきに女王から会見を要求されており，また女王に自殺をされてその計画が水泡に帰するといつたようなことのない様にするために，自から霊廟に来て女王と会見するのである。そこで女王は子供に対する要請を Caesar に認めさせようとして偽つて，Caesar に本心から屈服しているかの様に振舞う。ところが Caesar は自らの目的を果すために甘言をもつていかにも親切らしく装うが，"but if you seek / To lay on me a cruelty, by taking / Antony's course you shall bereave yourself / Of my good purposes, and put your children / To that destruction which I'll guard them from, / If thereon you rely" (V. ii. 127-132) と云つて，立ち去ろうとした。Caesar はただ自分の利益のみを考えて，女王の子供に対する要請には一顧をも与えていないこと

を Cleopatra は知る。そこで女王はもはや自殺をのばして生きている必要のないことを知る。自殺をするには予て用意しておいた Asps を霊廟の中に持ち込まさせねばならない。それには霊廟の警戒を弛めさせねばならない。それには自らが死ぬのを恐れてローマに行くのを覚悟しているかの如く見せかけて Caesar を安心させねばならない。そこで立ち去ろうとする Caesar を止めるために Cleopatra は財宝の目録を Caesar に手渡す，というのはそうするのは当時の敗戦国の君主の義務であり，習慣なのであるが，Caesar は私利私欲に敏い人間であることを Cleopatra は承知していたからでもある。そして幾多の部下が裏切つて Caesar の側に走つてしまつた今日，以前から女王に対して恨みを持つていた Seleucus を呼んでその目録の不正のないことを保証させようとするならば，必ずや彼は Caesar に用いて貰うために正直で忠勤らしくその不正を暴露するだろう。以上の考えが賢明で真剣だつた Cleopatra の心に咱嗟に閃いたのである。この目録には「つまらない物は記入してはありません。」と Cleopatra は前以つて Caesar に断言していることに吾々は注意すべきである。其処で Cleopatra は Seleucus を呼び入れる。Seleucus は Cleopatra の予想した通りその目録は不正であると云う。Cleopatra は怒つた振りの芝居を巧みに Caesar に演じてみせる。しかし言葉だけで，実際には Seleucus に女王は手を触れていない。Caesar は化かされて仲裁に入る。Cleoplatra は泣き言を Caesar に並べ，隠した財宝は普通の婦人が珍重するようなつまらない物であり，Livia や Octavia に仲をとりなしてもらうためのそれらよりいくらか価値のあるものだと，全く前々からローマに行く覚悟をしていたかの様に巧みに芝居をやつてのけたので，Caesar はうまく Cleopatra を欺くことが出来，自らの目的通りにうまくいくものと誤信して，得々として退場する。しかし実際は Cleopatra の方がすつかり Caesar を欺いてしまつたので Caesar は "Great Caesar is an ass unpolicied" (cf. V. ii. 306-307) ということになる。この様にして Cleopatra は Caesar を油断させて警戒の手を弛めさせ，田舎者に asps を届けさせ，自殺をとげたのである。Octavius Caesar は天下統一を目指し，権勢を得るために少しも動揺せず，あらゆるものをその目的のために用いている人間の姿を表現している一種の極と見るならば，Cleopatra は愛情のために一切を犠牲に捧げる一種の別な極と考えられる。Antony はこれらの両極に跨がり，絶えず重心の置き所を変え，最後に愛の極より浄化上昇して不死の世界へと Cleopatra と共に入つていたのであつて，Shakespeare のこの劇の Seleucus scene を Cleopatra の「よろめき」の場面とか，Octavius Caesar を色仕掛けで籠絡しようとして失敗した場面と見做すのは，ただこの場面ばかりではなく，この劇全体をも誤解した解釈といわざるを得ない。